

斑点米カメムシ類発生注意

～今年の薬剤防除は“2回”を基本にお願いします!!!～

本年も斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ・アカヒゲホソミドリカスミカメ）の発生が多く、特にイネ科雑草が出穂している畦畔や休耕田等の雑草地、ほ場内にノビエやホタルイが残っているほ場では、すくい取り頭数が多くなっています。

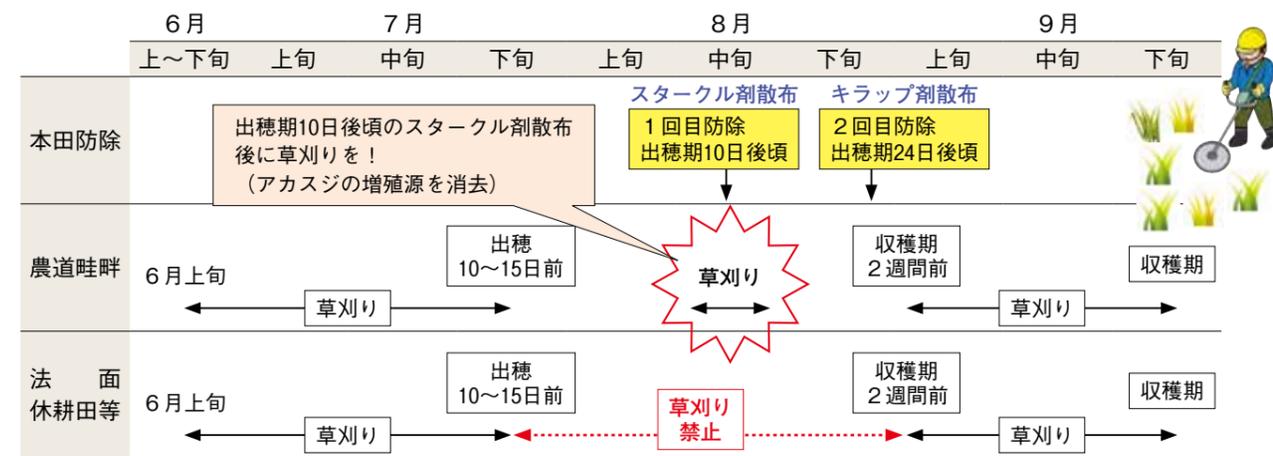
ほ場内や畦畔除草と薬剤防除を組み合わせ、斑点米被害を抑えましょう。

●主なカメムシの特徴と防除概要

 <p>体長：成虫で4.6～6mm程度 特徴：ノビエ、ホタルイ等のカヤツリグサ科の穂に産卵する。稲にはほとんど産卵しない。</p>	 <p>体長：成虫で5～6mm 特徴：水田内で一生を過ごし、稲の穂に産卵する。</p>
--	---

～耕種防除～

アカスジカスミカメはノビエやホタルイの雑草の穂に産卵し、増殖するため、出穂期10日後頃の茎葉散布剤散布後5日以内に畦畔や農道の草刈りを実施し、アカスジカスミカメの増殖地を無くしましょう。この期間を過ぎるようであれば草刈りは行ってはいけません。その後は収穫2週間前までは草刈りはしません。



～薬剤防除～

通常の防除は出穂期10日後頃の1回散布を基本としますが、発生量が多い場合は、出穂期10日後頃と出穂期24日後頃の2回散布を基本としましょう。

散布計画の策定と薬剤の準備は早めに行いましょう。

散布時期	薬剤名	希釈倍率／散布量 (10aあたり)	適正使用基準	
			使用時期	使用回数
出穂期10日後頃	スタークル粉DL	3kg	収穫7日前まで	3回以内
	スタークル液剤	1,000倍／60～150ℓ		
追加防除 出穂期24日後頃	キラップ粉DL	3～4kg	収穫14日前まで	2回以内
	キラップフロアブル	1,000～2,000倍／60～200ℓ		



いもち病・カメムシ対策に厳重警戒を

～出穂後は水管理で登熟向上、最後まで実らせよう～

稲は出穂期を迎えました。昨年は出穂以降の登熟遅延による充実度不足や斑点米カメムシ類の影響による被害粒の発生がありました。出穂後は水管理と病害虫防除に重点を置いた栽培管理を行いましょう。

水稻定点調査結果 7月24日現在 (仙北地域振興局農林部農業振興普及課)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	SPAD (葉緑素計値)
本年値	69.0	533	12.5	40.2
平年値	74.2	474	12.1	37.5
平年比	93%	112%	+0.4	107%
前年値	76.1	533	12.0	37.1
前年比	91%	100%	+0.5	108%

あきたこまち10地点

○定点調査結果

7月24日現在の「あきたこまち」の生育状況は、草丈69.0cmで短く（平年比93%）、茎数533本/m²で多く（平年比112%）、葉数は12.5葉（平年差+0.4葉）となっています。

葉数から見た生育は平年に比べやや早まっています。葉色（SPAD値）は40.2（平年比107%）と濃くなりました。（移植日の違いによりほ場間差があります）

これまでの平均気温から見ると、出穂期（50%出穂）は平年より早まると予想されます。

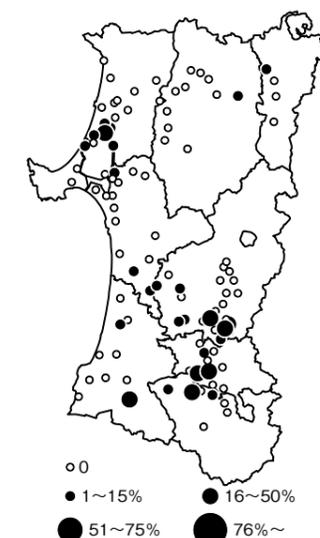
トピックス ～紋枯病の発生が多いと予想されています。～

7月21～23日に秋田県病害虫防除所が実施した巡回調査における県南部の紋枯病の発病株率は3.9%（平年2.6%）でやや高く、発病地点率は35.0%（平年22.0%）、要防除地点率は15.0%（平年5.6%）でいずれも高くなりました。

特に、県南部部の要防除地点率は他の地区に比べ高い結果となりました。今後も病勢の進展に好適な条件が続くと予想されますので、要防除水準（発病株率が15%以上）を超えるほ場では出穂直前～穂揃期に以下の茎葉散布剤を株元に到達するように散布しましょう。

薬剤名	希釈倍率・10a使用量
モンカットファイン粉剤20DL	3～4kg
モンセレン粉剤DL	
モンカットフロアブル	1,500倍
モンセレンフロアブル	

※詳しい防除対策は4ページ（ウラ表紙）に記載しております。



巡回調査における発病株率（7月21～23日調査）

園芸施設共済 台風シーズン到来!今すぐご加入を!

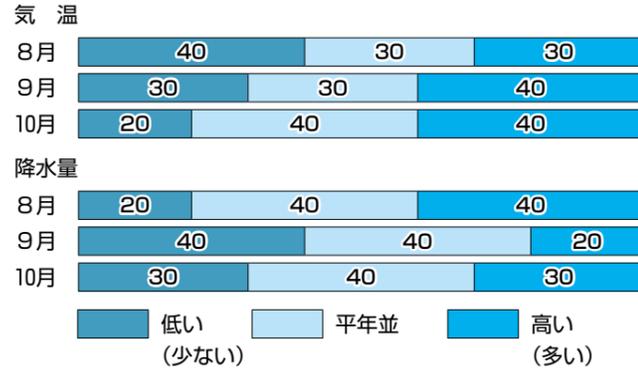


注意 台風の進路が発表されたときなどの かけ込み加入はできません。

参考)4間×10間のハウス
28万9千円の補償金額
掛金は4,260円(12ヶ月)です

今後の気象経過 ～8月天候不順に注意を～

<今後の気温、降水量の予報>



7月24日に仙台管区气象台から東北地方3か月予報が発表されました。

8月は平年に比べ晴れの日が少なく、降水量は平年並みか多くなると予想されています。

登熟期間は雨が少なく日照不足が懸念されます。こまめに天気予報をチェックし、適切な水管理、病害虫防除を行いましょう。

出穂期からの水管理

- ①出穂当初は水を多く必要とする時期なので、出穂後10日間は5～6cm程度の水深で湛水します。その後は2～3cmの浅水、間断かん水とします（下図参照）。
- ②イネの活力低下を防止するため、気温が30℃以上になる日はかけ流しかん水を実施し地温を下げるのが理想的です。ただし、今年は水不足傾向にありますので、地域で協力し可能なところのみで行ってください。
- ③登熟期にフェーンなど乾燥した風が強くと、穂の白枯れや褐変被害が出ることがあります。これを防ぐには、湛水状態とし脱水などの水分ストレスをやわらげる対策が必要です。
- ④落水の時期は、概ね出穂後30日とします。早期に落水すると葉色の低下、枯れ上がり、根の機能減退により収量、品質、食味が低下する場合がありますので注意してください。

水不足時の対応 ～地域で協力し合い節水を心がけましょう～

- ①用水不足が懸念される場合は、地域農家や関係機関と協力して節水管理に努め、入水時間を申し合わせるなど、計画的な用水の供給に努めます。
- ②溝切りを実施したほ場では、溝に通水するだけでも大丈夫です。その他ほ場でも、かん断かん水で、土壌水分を一定に保ちましょう。

白粒・胴割れ粒対策 ～水管理で高温登熟を防ぎ、白粒・胴割れ粒の発生を防ぎましょう。～

○高温登熟被害粒の発生要因と技術対策

項目	気象的要因	栽培的要因	技術対策	
白未熟粒	乳白 心白	出穂後4～20日頃の高温	籾数過多	籾数制御 かけ流し 夏期常時湛水
	背白 腹白	出穂後16～24日頃の高温	登熟期後半の肥切れ	穂肥 かけ流し 夏期常時湛水
充実度不足粒	登熟期間の高温	登熟期の肥切れ	穂肥 かけ流し	
胴割れ粒	出穂10日間の高温	登熟期の肥切れ 早期落水 刈り遅れ、過乾燥	穂肥 かけ流し 夏期常時湛水 適期刈り取り、2段乾燥	

いもち対策急るな！ ～天候によって激発の恐れあり～

葉いもちの発生が全く認められず、周辺の発生田からの伝染の影響のないほ場では、防除の必要はありません。ただし、葉いもちが多発しているほ場が隣接している場合などは、出穂期～7日後にラブサイド剤の茎葉散布をしてください。

また葉いもち発生が認められるほ場では、出穂直前と穂揃期にラブサイド剤またはビーム剤の茎葉散布をしてください。

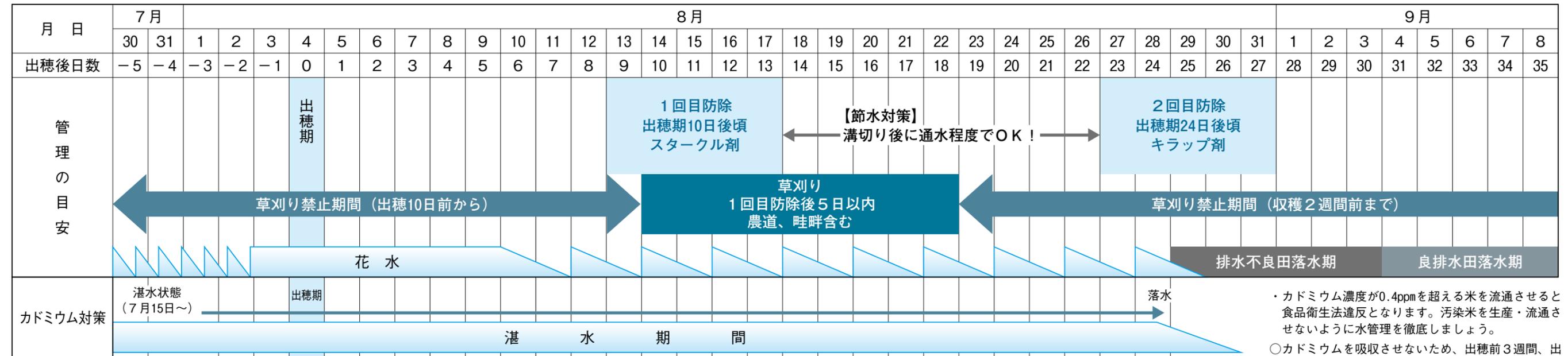
○無人ヘリ以外の防除方法について

散布のポイント	薬剤名	希釈倍率／散布量 (10aあたり)	適正使用基準	
			使用時期	使用回数
予防剤と治療剤の混合剤	ブラシン粉剤DL	3～4kg	収穫7日前まで	2回以内
	ブラシンフロアブル	1,000倍／60～150 $\frac{L}{ha}$		
出穂直前と穂揃期の2回 ※多発時は傾穂期に追加防除	ラブサイド粉剤DL	4kg	収穫7日前まで	3回以内
	ビーム粉剤DL			
	ラブサイドフロアブル	1,000～1,500倍／60～150 $\frac{L}{ha}$		
	ビームゾル	1,000倍		

※フサライドの本田での総使用回数は3回以内なので注意する。

(フサライドはラブサイド剤、ブラシン剤に含まれる成分です。総使用回数に注意してください)

※ビームゾルは傾穂期以降に散布すると葉害を生じることがある。



・カドミウム濃度が0.4ppmを超える米を流通させると食品衛生法違反となります。汚染米を生産・流通させないように水管理を徹底しましょう。

○カドミウムを吸収させないため、出穂前3週間、出穂後3週間の計6週間は常時湛水管理を行い、田面が空気に触れないよう管理してください。(田面が露出すると土壌が酸化し、カドミウムが吸収されやすくなります)。